

ロシア語名詞変化覚え書き

——пóлымя の綴字の改正——

城 田 俊

はじめに

§ 1. ロシア語を或程度こなす人なら誰でも время がいかなる変化を行うかを知っています。それは путь や кость と同じく単数の生格・与格・前置格が一致する語形変化で、文献〔1〕では第Ⅲ変化の中性変化、〔2〕では第Ⅱ中性変化と呼ばれるものです。筆者はこれを中性補助変化と呼びたく、本稿でも筆者の用語で通しますが、用語上の混乱がおこるといけませんので、これら変化パターンの名称の異同をここに表示します（第1表）。

〔1〕		〔2〕		本 稿		語 例
第Ⅰ變化	男 性	第Ⅰ變化	男 性	基本變化	男 性	стакáн
	中 性		中 性		中 性	сло́во
第 Ⅱ 變 化			女 性		女 性	ко́мната
第Ⅲ變化	男 性	第Ⅱ變化	男 性	補助變化	男 性	пу́ть
	中 性		中 性		中 性	вре́мя
	女 性		女 性		女 性	ра́дость

第1表 語形変化の名称

語 尾

§ 2. この время の単数主格の語尾は何でしょうか。常識的には я であると答えることができます。〔4〕のような高度に専門的な変化の研究書でもこの я を、事実、語尾として扱います。この я は время, имя 等に於て先行する м が軟子音であることを示し、その文字の背後にある母音は а である、ということはロシア語の綴字の読み方を習った人なら誰でも解ります。しかし、これら語の語尾は、本来、何か、я なら я でもいいが、この я の背後に隠れ

ている〈音素〉は一体何かということはなかなか困難な問題で、学者間で一致した意見があるわけではありません。それは音素に対する考え方によることは勿論ですが、ここでいう中性補助変化に属する名詞の範囲の限り方、また、中性補助変化とはいかなる変化であるかという考え方により、まちまちの答が出し得るからです。代表的な意見をあげます。

(1) 〈a₁〉. 原形が、綴字でいえば -мя, 音声でいえば [m'ə] で終る名詞 (例えば время) の末尾の [ə] に当る音がそれら名詞の単数主格の語尾であると考え、資料をそれら名詞に限るなら、この [ə] はいかなる〈音素〉のあらわれであるかははっきりわからないということになります。なぜなら、これらの語ではこの語末の音にアクセントが置かれることがないからです。母音は、普通、アクセント下にもちきたらせた時、そのもとの姿がはっきりします ([6] 359-361頁)。このままでは〈a〉である可能性もあり、また、〈o〉である可能性もあります。このような音韻論的な考えをしっかりと守るデュロヴィッチは、ですから、〈a₁〉でそれを表記します ([7] 141頁)。〈a₁〉とはひらたくいえば、〈a〉であるか〈o〉であるかわからないということです。

(2) 〈o〉. 〈a〉は基本変化において中性名詞が決してとらない単数主格の語尾であり、〈o〉は中性名詞、例えば, слово, веществó が必ずとる単数主格の語尾です。ですから、補助変化の中性名詞の単数主格の語尾も〈a〉であるというより〈o〉であるといった方がより説得的であるということになります。ヤコブソンが, время 等の単数主格は〈o〉であると定めたのもこのような考えの歩を進めた結果と思われます ([5] 166頁)。かくすると、単数主格の語尾は男性変化・中性変化で基本変化と補助変化で対応が成立ちます。つまり、男性基本変化 (例えば стакáн) と男性補助変化 (пу́ть) では共に単数主格の語尾は φ (ゼロ), 中性基本変化 (例えば сло́во) と中性補助変化のそれは〈o〉となり、それぞれパラレルをなすことになります。この点で、また、次に述べる〈a〉説が持つ、単数主格、複数主格同外形という欠点を取除いている点で、〈o〉説は秀れています。しかし, дитя́, порося́ は一体いかなる変化に属するののかという問題がおこります。もし、どこにも持っていきようがなく、やはり中性補助変化に属するとするなら、この2語の単数主格の語尾は規範語尾ではなく特殊語尾であるという論証が必要となりますが、それには十分な論拠がないよう思われます。

(3) 〈a〉. дитя́ は語幹・語尾に一部特殊性があり, порося́ も、普通、単数主格と対格しか使われないにしても, время と同じ中性変化名詞であり、かつ、

その単数主格の語尾は特殊語尾であるとする十分な論拠がないなら、この2語の音声から、これらの語の単数主格は〈a〉であるとすることができます。なぜなら、この2語では語尾にアクセントが落ちその背後にある音素は〈a〉であるということをはっきり示すからです。この説は *дитя́, поросё́* の2語の処置の問題を解決しますが、男性変化のみ基本変化と補助変化の単数主格が同じ語尾 ϕ をとるだけで、中性・女性変化ではその対応が欠けるという結果を招きます。また、単数主格と複数主格は語幹の違いにより区別されるとしても、語尾としては同じ〈a〉であるという、他の語類にはみられない例外的な語尾の外形一致をここに認めなければならなくなります。〈im'-a〉 *и́мя* (単数主格)、〈im'on-a〉 *и́менá* (複数主格)。

(4) ϕ . *время́* の類も *дитя́, поросё́* も同じ中性補助変化名詞と考えるが、その単数主格は ϕ であるという考えもあります。〔3〕(I, 466頁)はこの立場をとります。この考えに従うと、これら語の原形末の [ə] や [á] は、単数主格語尾の ϕ の接合に当って末尾の子音が脱落し、その前にある母音〈o〉ないし〈a〉が裸出してきたものということになります。この考えは、名詞の語幹は必ず子音で終るという原則〔8〕17頁)に例外をもうけることになります。このように欠点は大きいのですが、利点も大きいといわざるを得ません。*дитя́, поросё́* の処置を上手に行い、単数・複数の主格の外形一致を避け得るというだけでなく、それは補助変化の性質を骨太にえがきだすことができるからです。補助変化の単数主格は男性 (*пу́ть*)、女性 (*ко́сть*)、中性 (*время́*) に拘らず、全て ϕ であるとすることができます。また、*дитя́* のアクセントを語幹不動アクセントとすることができ、ザリズニャークのように *e''* 型という型を *дитя́* 1語のためだけにみとめないで済みます〔4〕参)。その上、この説をとると、いわゆる「語幹変化」というものが、単数・複数に対応するものを除けば、全て語尾の外容(音素構成)に呼応する照応的な変化として記述できる可能性がでてくるのです。

語 幹

§ 3. 名詞の変化は語尾の変化と語幹の変化によって記述されます。

語形から語尾を取去った残りを語幹といいます。多くの語に於ては語形がちがっていても語幹は一致します。しかし、それが一致しない語も存在します。ある語形の語幹がその他の語形の語幹と一致しない場合、語幹に変化がおっていると考えられます。この語幹の変化は出沒母音によるものと出沒母音によ

らないものと大別されます。出没母音とは母音を頭にもたない文法形態素(語尾ばかりではありません)の接合に呼応して、語幹末子音群の最終子音直前にあらわれる母音をいいます(出没母音はザリズニャークに従いその母音の上に*を付すことによって示します)。 $[at'ets]$ $\langle otets-\phi \rangle$ отец, $[atstsá]$ $\langle otets-a \rangle$ отца。出没母音による語幹の変化は、このように、語尾の音的構成に呼応する語幹の照応的变化です。出没母音によらない語幹の変化が、普通、「語幹変化」と呼ばれます。

ザリズニャークが行った「語幹変化」の記述は、これ以上のものは望めず、今後ずっとこれに従っていくほかないと思われるくらいみごとです。そこでは「変化」にあたって交替、脱落(ϕ への交替)、付加(ϕ からの交替)されるものは要素に分解されると共に、その「変化」のあり方は語形の意味に応じ、名詞では、5類にわかれます: 1類 単数形—複数形。例 $\langle ok-o \rangle$ око— $\langle otj-i \rangle$ очи。2類 単数主格形—非単数主格形。例 $\langle dotj-\phi \rangle$ дочь— $\langle dotj \cdot isr'-i \rangle$ дочери, $\langle dotj \cdot isr'-am \rangle$ дочерям。3類 非複数生格形—複数生格形。例 $\langle pesen'-a \rangle$ песня, $\langle pesen'-am \rangle$ песням— $\langle pesen-\phi \rangle$ песен。4類 非複数与格・造格・前置格—複数与格・造格・前置格。例 $\langle tserkov'-\phi \rangle$ церковь, $\langle tserkov'-ju \rangle$ церковью, $\langle tserkov'-ej \rangle$ церковей— $\langle tserkov-am \rangle$ церквам, $\langle tserkov-am'i \rangle$ церквами, $\langle tserkov-ax \rangle$ церквах。5類 単数・複数主格—非単数・複数主格。例 дитя—дитяти ([4] 239頁参。ただし、ザリズニャークは綴字言語に話を限ります)。

注記 $\langle is \rangle$ は $\langle i \rangle$ $\langle e \rangle$ $\langle o \rangle$ $\langle a \rangle$ である可能性を持つ〈音素〉を示します。下に書かれた $\sim$ は先行するものの硬子音・軟子音の特徴は後行するものに依存するかたまり音素を示します。上にひかれた $\sim$ は無声・有声の特徴における同様のかたまり音素を示します。 $-$ は語幹と語尾の境目を示します。

しかし、4類の軟子音 $\langle v' \rangle$ の硬子音 $\langle v \rangle$ への交替はあきらかに、 $\langle a \rangle$ を頭にもたない語尾であるか、それを持つ語尾であるかに呼応しています。それに複数与格・造格・前置格がまとまって他の語形と対立する意味上の必然性はどうもみとめがたいように思われます。このように考えていくと、2類であげたもの、例えば дочь における $\langle isr' \rangle$ の付加も ϕ 語尾(単数主格)と非 ϕ 語尾(単数主格以外)に呼応するように見えますし、3類であげた песня における軟子音 $\langle n' \rangle$ の硬子音 $\langle n \rangle$ への交替もやはり、 ϕ 語尾との呼応としてみとめられます。しかし、「語幹変化」をそのように記述しにくいものもまたあります。特に время 等では単数主格に有形語尾をみとめると、その「語幹変

化」と ϕ 語尾との呼応関係はみとめがたくなります。しかし、それが前述のように、 ϕ 語尾なら、語幹の〈n'〉の ϕ との交替（脱落）は ϕ 語尾に呼応するという解釈がとれる可能性がでてきます。

本稿の目的は「語幹変化」の問題の解明にあるのでも、また、その記述にあるのでもなく、それ以前或はそれを越えた所にあります。ですから、詳しくは稿をあらためたいと思いますが、筆者には「語幹変化」というのは複雑でむずかしい事柄の理解の仕方と思われてなりません。そのような語幹は「変化」するのではなく分岐しているのではないかと思えるのです。変化も分岐も同じではないかといわれてしまえばそれまでですが、分岐と見た方が事柄のイメージがはっきりしてくると思っています。

ここで今迄「語幹変化」といわれてきた事柄を分岐という考えでとらえなおし、後述のように、単数形・複数形という内容による分岐以外は語尾の外容に照応する分岐であることを示し、その体系において время 等の語の語幹の分岐はいかなる位置を占めるかをあきらかにしておきたい思います。

分岐語幹

§ 4. 出沒母音によらずに当該語の諸語形の語幹に不一致がみとめられる場合、その語は分岐語幹を持つといいます。分岐語幹以外の語幹を単一語幹と呼びます。出沒母音を持つ語幹も単一語幹に含まれます。分岐語幹は語尾の内容ないしはその外容に呼応してことなる語幹が分岐するものですが、その分岐点は語幹末ないしは語幹中の母音、ないしは語幹全体にあり、決して語幹末子音直前という位置には存在しません。

分岐語幹の分岐のあり方には次の3通りがあります：Ⅰ 単数語尾につく語幹（単数用語幹と略称）と複数語尾につく語幹（複数用語幹と略称）とが分岐する。 $\langle \frac{a}{b} \rangle$ — 単 — 例 $\langle \frac{k}{tj} \rangle$ — 単 — ók-o, óč-i . Ⅱ 有形語尾につく語幹（非 ϕ 語尾用語幹と略称）と ϕ 語尾につく語幹（ ϕ 語尾用語幹と略称）とが分岐する。

$\langle \frac{a}{b} \rangle$ — 非 ϕ — 例 $\langle \frac{isr'}{\phi} \rangle$ — 非 ϕ — dóčer-i, dóč . Ⅲ 〈a〉を頭に持たない語

尾につく語幹とそれを持つ語尾につく語幹とが分岐する。 $\langle \frac{a}{b} \rangle$ — 非〈a〉 — 例 $\langle \frac{*v'}{v} \rangle$ — 非〈a〉 — tserko

注記 分岐語幹を表記する場合、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにわたり、先に書いた語幹を上、後

に書いた語幹を下に示し、それぞれその後の一を引き、その内容上、外容上の条件を記します（上例参）。

語幹の分岐はⅠでは語尾の内容に対応し、Ⅱ、Ⅲでは語尾の外容に対応します。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲはそれぞれ独立しても存在しますが、Ⅰの分岐の後にⅡの分岐がおこるものもあります。つまり内容的分岐の後に外容的分岐がおこるものがあります。Ⅲの分岐は *церковь* 1語にみとめられ、個別的なものに過ぎず、Ⅰ、Ⅱと結びついて存在することはありません。この組合せを考慮すると語幹の分岐のあり方は4通り（詳しくいえば5通り）あることになります：A. 単数用語幹と複数用語幹が分岐する；B. 非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹とが分岐する；C. 単数用語幹と複数用語幹が分岐し、そのいずれかの内で、非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹とが分岐する。(a) 単数用語幹内で非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹とが分岐する。(b) 複数語幹内で非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹とが分岐する；D. <a>を頭に持たない語尾につく語幹とそれを持つ語尾につく語幹とが分岐する。

以下A. B. C. Dの順で記述しますが、分岐の仕方（交替・脱落・付加）についてはここでは述べません。また、分岐の仕方にバラエティーが最も富むAは通常記述されているものと特にことなりませんので詳しくは省略し、代表的な例をあげるのにとどめます。

A. 単数用語幹と複数用語幹の分岐

$\langle \text{sa} \frac{\text{d}}{\text{se}} \frac{\text{d}}{\text{d}} \rangle$ — 単 сacéd , $\langle \text{tj} \frac{\text{o}}{\text{e}} \text{r} \frac{\text{t}}{\text{t}} \rangle$ — 単 чёрт , $\langle \text{brat} \frac{\phi}{*} \frac{\phi}{\text{ej}} \rangle$ — 単 брат ,
 $\langle \frac{\text{tʃiʒla} \text{vek}}{\text{ʔud}'} \rangle$ — 単 человéк
 — 複

B. 非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹の分岐

(1) $\langle \frac{\text{d}}{\text{d}'} \rangle$ — 非 ϕ : $\langle \text{gospo} \frac{\text{d}}{\text{d}'} \rangle$ — 非 ϕ госпóдь
 — ϕ

(2) $\langle \frac{\text{n}'}{\text{n}} \rangle$ — 非 ϕ : 原形が<子音（奥舌音を除く）+ $\text{o}/\text{e} + \text{n}' + \text{-a}$ >で終り、 ϕ
 — ϕ

語尾の接合に当りアクセントが o/e の直前の母音におちる名詞及び *шестерня*

例 $\langle \text{base} \frac{* \text{n}'}{\text{n}} \rangle$ — 非 ϕ бáсна (бáсен)
 — ϕ

(3) $\langle \frac{\text{i} \text{r}'}{\phi} \rangle$ — 非 ϕ : $\langle \text{dotj} \frac{\text{i} \text{r}'}{\phi} \rangle$ — 非 ϕ дóчь (その他 мáть)
 — ϕ

- (5) $\langle \frac{\phi}{os} \rangle$ — 非 ϕ : $\langle xr'ist \frac{\phi}{os} \rangle$ — 非 ϕ Христос

C. 単数用語幹と複数用語幹の分岐後の非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹の分岐

(a) 単数用語幹内での非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹の分岐

- (1) $\left. \begin{array}{l} \frac{n'}{\langle \phi \rangle} \\ \frac{n}{\langle \phi \rangle} \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{— 單} \\ \text{— 複} \end{array} \begin{array}{l} \text{— 非 } \phi \\ \text{— } \phi \end{array} : \text{原形が } [m'e] \text{ で終る名詞 (ПОЛЫМЯ に就ては後述)}$

例 $\langle \underbrace{\text{vrem}'o}_{\text{n}} \rangle \left. \begin{array}{l} \text{n}' \\ \phi \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{—單—非}\phi \\ \text{—}\phi \end{array}$
 n —複 время 《時》

注記 $\left. \begin{array}{l} \underline{n'} \\ \langle \phi \rangle \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{—非}\phi \\ \text{—単} \\ \text{—}\phi \end{array}$ は、単数用語幹と複数用語幹の分岐では軟子音〈n'〉が硬子音〈n〉に交替し、単数用語幹内での非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹の分岐では末尾の〈n'〉が脱落することを示します。

поросѣ は〔9〕〔4〕では語形として単数の直接格しか認めていませんが、〔12〕〔13〕は поросѣ, поросѣти, 複 поросѣта, поросѣт を記載します。もしそう

なら、その語幹は次のように表記できます。

$\langle \text{pa}_1\text{ros}'\text{a}$	$\frac{\text{t}'}{\phi}$	$\left. \begin{array}{l} \text{— 非}\phi \\ \text{— 單} \\ \text{— }\phi \end{array} \right\}$
	$\frac{\phi}{\text{t}}$	$\left. \begin{array}{l} \text{— 非}\phi \\ \text{— 單} \\ \text{— }\phi \end{array} \right\}$
	$\frac{\text{t}}{\phi}$	$\left. \begin{array}{l} \text{— 非}\phi \\ \text{— 單} \\ \text{— }\phi \end{array} \right\}$

— 複

- (2) $\left\langle \begin{array}{c} \text{t'} \\ \text{a}\phi \end{array} \right\rangle \left\{ \begin{array}{l} \text{—單} \text{—非}\phi \\ \text{—}\phi \end{array} \right. : \left\langle \begin{array}{c} \text{t'} \\ \text{det'a}\phi \end{array} \right\rangle \left\{ \begin{array}{l} \text{—單} \text{—非}\phi \\ \text{—}\phi \end{array} \right. \text{ дитя (複 дѣти)}$
 $\begin{array}{cc} \phi & \text{—複} \end{array} \quad \begin{array}{cc} \phi & \text{—複} \end{array}$

注記 $\left. \begin{array}{l} \text{t'} \\ \langle \text{a}\phi \rangle \\ \phi \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{一非}\phi \\ \text{一}\phi \\ \text{一複} \end{array}$ は、単数用語幹と複数用語幹の分岐では〈at〉が脱落し、単数用語幹内での非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹の分岐では〈t'〉が脱落することを示します。

(b) 複数用語幹内での非 ϕ 語尾用語幹と ϕ 語尾用語幹の分岐

- (1) $\left\langle \begin{array}{c} \overline{n'} \\ \overline{n} \end{array} \right\rangle \left\{ \begin{array}{c} \text{—單} \\ \text{—複} \\ \text{—}\phi \end{array} \right. \text{—非}\phi : \left\langle \begin{array}{c} \overline{n'} \\ \overline{n} \end{array} \right\rangle \left\{ \begin{array}{c} \text{—單} \\ \text{—複} \\ \text{—}\phi \end{array} \right. \text{—非}\phi$ сáжень (複數生格 сáжен)

- (2) $\left\langle \begin{array}{c} \text{god} \\ \text{god} \\ \text{let} \end{array} \right\rangle \left\{ \begin{array}{l} \text{— 単} \\ \text{— 非 } \phi \\ \text{— 複} \\ \text{— } \phi \end{array} \right. \quad \text{год (複数生格 лет)}$

D. <a> を頭に持たない語尾につく語幹とそれを持つ語尾につく語幹の分岐

- $\left\langle \begin{array}{c} \text{tserko}^* \text{v}' \\ \text{v} \end{array} \right\rangle \left\{ \begin{array}{l} \text{— 非 } \langle a \rangle \\ \text{— } \langle a \rangle \end{array} \right. \quad \text{цѣрковь}$

са́жень と год は複数生格だけ他の語形と語幹がこととなります。複数生格の語尾は ϕ ですが、単数主格も ϕ です。このようなことは、вре́мя の類のみならず、солда́т のような約 200 語に及ぶ男性変化名詞にみられる ([14] 95 f, 104 f 頁) ことで驚くに足りませんが、内容による分岐を単数用語幹と複数用語幹の分岐にしか認めない限り、上記 2 語は C(b) でえがいたようにやや人工的な分岐になってしまいます。もし、複数生格以外の語尾につく語幹と複数生格語尾につく語幹とが分岐するという内容による分岐をもう 1 つ認めるなら、このような人工的な分岐の記述をせずすますことができます。しかし、そうすると分岐のあり方の記述の段階が 1 つ増えると共に、広くみとめられる ϕ 語尾に対応する語幹の分岐という一面が一部こぼれ落ちてしまいます。

語形の形成

§ 5. 中性補助変化を行うかどうかは単純な目安で識別できます：原形が [m'ə] で終る名詞及び дитя́, порося́ が中性補助変化を行います。これら語のアクセントは зна́мя が A 型, порося́ が B 型, дитя́ が A₁ 型, それ以外は C 型です。зна́мя の複数形では原形での位置より 1 音節アクセントが後退します。

注記 アクセント型の名称は [2] [1] [16] に基本的に従います。

語幹は全て § 4 の C(a) で記したような分岐語幹です。дитя́ は単数造格；複数主格・生格・造格で特殊語尾 <oj(u)>; <i>, <ej>, <m'i> をとります。дитя́, порося́ を除き全て不活動体名詞です。

以上のような情報はアクセントを含め全て語幹が担っているものとします (第 2・3 表の語幹の表記参)。語形は語幹に語尾を接合することによって形成されます。

1. 規範語尾をとる語の語形の形成。

規範語尾をとる語の語形の形成を例示します (第 2 表)。

語 幹 語 尾			[A型]		[C型]	
			$\left\{ \begin{array}{l} n' \\ \langle \text{znám}'o \cdot \phi \rangle \end{array} \right\}$		$\left\{ \begin{array}{l} n' \\ \langle \text{ím}'o \cdot \phi \rangle \end{array} \right\}$	
			[不活]		[不活]	
			$\left\{ \begin{array}{l} n \\ \text{アクセント一音節後退} \end{array} \right\}$		$\left\{ \begin{array}{l} n \\ \text{一複} \end{array} \right\}$	
形	単数	主・対	ϕ	[znám'ə]	[ím'ə]	
		生・与・前	$\langle i \rangle$	[znám'inɪ]	[ím'in'ɪ]	
		造	規 $\langle om \rangle$ / 特 $\langle oj(u) \rangle$	[znám'in'əm]	[ím'in'əm]	
	複数	主	規 $\langle a \rangle$ / 特 $\langle i \rangle$	[znam'ónə]	[ím'iná]	
		対	=			
		生	規 ϕ / 特 $\langle ej \rangle$	[znam'ón]	[ím'ón]	
		与	$\langle am \rangle$	[znam'ónəm]	[ím'inám]	
		前	$\langle ax \rangle$	[znam'ónəx]	[ím'ináx]	
		造	規 $\langle am'i \rangle$ / 特 $\langle m'i \rangle$	[znam'ónəm'i]	[ím'inám'i]	

第2表 規範語尾のみをとるものの語形の形成

2. 特殊語尾をとる語の語形の形成。

дитя́ は既述の通り単数造格と複数主格・生格・造格で特殊語尾を選択します。その語形の形成の様子を表示します（第3表）。

ПОЛЫМЯ の変化

§ 6. §4のC(b)での2語に関するちょっとした欠点を除けば記述は何もかもうまくいったようです。しかし、このような記述をためらわせる語が一語あります。

[2] (375頁) も [1] (491頁) もここでのいう中性補助変化名詞として次の12語を掲げます：бре́мя, вре́мя, вы́мя, зна́мя, пле́мя, я́мя, пла́мя, по́лымя [古], се́мя, стре́мя, те́мя, дитя́。

注記 [9] ではこれ以外に бере́мя, льно́семя, полу́ймя が見出され、計15語。поро́ся を加えれば、計16語となります。

問題は по́лымя をあげていることです。この語には単数主格・対格（共に по́лымя）・造格（по́лымем）の3語形しかなく、他の語形は欠落するとされます（[4] 99頁, 317頁；[9]；[1] 492頁）。この3つの語形から考えられる

語 幹 語 尾			[A ₁ 型]	
			$\frac{t'}{\phi}$	—非 ϕ
語 形	単 数	主・対	ϕ	[d'it'á]
		生・与・前	<i>	[d'it'át'ɪ]
		造	規<om>/ 特<oj(u)>	[d'it'át'ɪj] ([d'it'át'ɪju])
	複 数	主	規<a>/ 特<i>	[d'ét'ɪ]
		対	=	[d'it'éj]
		生	規 ϕ / 特<ej>	
		与	<am>	[d'ét'əm]
		前	<ax>	[d'ét'əx]
		造	規<am'i>/ 特<m'i>	[d'it'm'í]

第3表 дитя の語形の形成

語幹は明らかに [pólɪm'] であり、語尾は [ə], [em] です。語幹にはいかなる分岐もみとめられません。単一語幹 <polim> に語尾が接合して語形がつくられているに過ぎません。もし、これが время 等と同じ分岐語幹を持つなら、造格は *пóльменем とならなければなりません。この語は他の全ての中性補助変化名詞が貫ぬかれる特徴である分岐語幹を持たないのです。語尾をよく見てみましょう。造格 [əm] は <om> のあらわれと考えるのが妥当でしょう。主格・対格の [ə] は必ずしも <a> のあらわれではなく、<o> のあらわれでもあり得ます。単一語幹に単数主格で <o>、造格で <om> をとって語形を形成するのは слóво 等が属する中性基本変化名詞です。пóльмя は一部語形が欠落するとしても、音声的には中性基本変化の規範変化名詞として完全に記述できる諸特徴をそなえています。今迄、文法家は語源に惑わされてか、同種の語と全く同じ -мя [m'ə] を原形末に持つことにひかれてか、造格の外容を詳しく検討せずに盲目的に当語を中性補助変化名詞にかぞえてきましたが、それには何等の根拠はなく、あらゆる外形上の特徴は中性基本変化名詞であることを告げています。

このことに [1] が気付くのはもう一歩という所だったようです。そこでは、この語は中性補助変化名詞に属するが、斜格は造格 (пóльмем) を除き使用さ

れない、ただし文芸作品では中性基本変化の語尾をもつ語形が見出される、と指摘し、Но дымилась тихая дорога В незакатном по́лыме озер (Есенин). を文例として掲げますが、по́лыме が中性基本変化の語尾をとる語形なら、по́лымем もそうであり、по́лымья も少なくとも音声的にはそうである、ただ、邪魔をしているのはその正書法的外容である、と気付いてよかった所だと思われます。

注記「標準的」には斜格は造格以外欠落するとしても、それをずれる所で по́лымья は中性基本変化名詞として（或程度自由に）その他の語形をつくっているふしがあります。上掲例もその一つですが、[13] は与格として по́лымю を記載します。

今迄、中性基本変化名詞で対軟子音を語幹末に持つ語は мо́ре, го́ре, по́ле の3つであり、語幹末の対軟子音は <r', l'> という流音しかないとされてきましたが（[7] 97-98頁）、ここにもう一語迷子となっていた по́лымья がみつかり、語幹末子音として <m'> が新たに加えられることになります。

さて、この事態を文法としてどう処置したらよいのでしょうか。

по́лымья の綴字の改正

§ 7. по́лымья という正書法的外容をそのまま残し、かつ、それを вре́мя と同類に扱いたいなら、вре́мя 等の語尾は ϕ であるとか、ここで記したような分岐語幹を持つとかいうようなことは云わない方がよいと思われます。そう云えば、ただちに、по́лымья, по́лымем はどうやって語形が造られるかが問題となり、ひいては мо́ре 等とことならないことに気付かれてくるからです。綴字言語では、まず、例えばザリズニャークが行うよう、語尾を я ('a) とし、「語幹変化」は単数主格—それ以外の語形の段階で $\phi \rightarrow \text{он}$ (вре́мя 等), $\phi \rightarrow \text{ан}$ (се́мя, стра́мя), 単数形—複数形の段階で軟子音から硬子音への交替をみると、по́лымья はこのような「語幹変化」が行なわれない、としておけば、寝た子をおこさずにすむかもしれません。音声言語では、単数主格語尾を <a> とし、それなりに記述される「語幹変化」がない例外として по́лымья をあげれば、事を荒立てずにすみましょう。（[3] は語尾を ϕ とし、いわば寝た子をおこしたわけで、по́лымем の形成が問題となる所ですが、この語に言及のないのは残念です）。しかし、このような記述は、現実的配慮に富む政策的態度としても、学問的態度とはいえません。

抜本的処置方法は、欠落語形を注するとしても [póɭm'ə] は сло́во, мо́ре と同じ中性基本変化名詞として扱うことと筆者は考えます。ですから、中性補

助変化名詞の範囲は дитя́ (порося́) 及び原形が [m'ə] で終るもの、ただし [pólm'ə] を除くとされなければなりません。かくして、中性補助変化名詞は例外なく分岐語幹(「語幹変化」)を持つことになります。また、(綴字形態の文法で)、中性基本変化名詞の範囲は不変化名詞を除き原形が o 及び e で終る名詞及び по́лымя とされなければなりません。そしてその単数主格の特殊語尾として я をみとめなければなりません。このことは по́лымя の正書法的外容の改正の必要を示唆するものです。

мо́ре 等の語末に e があるのは、中性基本変化名詞の単数主格の語尾は(я を書かず) e とする、というかたちで、伝統的に定められているからです。по́лымя ももしそれが中性基本変化名詞なら、по́лыме と書かれてしかるべきです。こう書かれれば、綴字言語の文法に於けるこの語の位置はただちに定まります。

注記 「書きことば、特に、19世紀の詩歌」では、語幹変化が行なわれていない имя, пла́мя, те́мя, вы́мя 等の語形が見出されます([1] 492頁)。その場合、理論的には語形変化が行なわれる語と行なわれない語があり、前者は中性補助変化名詞として従来通りの正書法的綴字を持ち、後者は中性基本変化名詞として име́, пла́ме, те́ме, вы́ме という綴字を持つ、ということになります。

しかし、「по́лыме だと?!」と詩人や作家の拒否反応がきこえてくるかもしれません。このような語を使いたがるのは一般の人ではなく、こういった天職にある人達です。пла́мя と語源的・意味的関連を持ち、それと並んで長い歴史と伝統を生き抜いてきたこの語の綴字を一部なりとも改正するという社会的・文化的影響がかならずある実践が、文法体系のために行うに足ることかどうか、実際上行い得るかどうか、は、言語政策の問題に属し、筆者にしっかりした意見があるわけではありません。理論上のことは述べ得ても、実際上の問題はロシア人、ロシア語社会にゆだねるのが当然でしょう。

参 考 文 献 (順不同)

- [1] Академия Наук СССР. Русская грамматика. М., 1980.
- [2] Академия Наук СССР. Грамматика современного русского литературного языка. М., 1970.
- [3] Československá Akademie Věd. Русская грамматика. Praha, 1979.
- [4] Зализняк А. А. Русское именное словоизменение. М., 1967.
- [5] Якобсон Р. Морфологические наблюдения над славянским склонением. Selected Writings, II, 1971. 154-183.
- [6] 城田俊『ロシア語の音声—音声学と音韻論—』風間書房 1979。

- [7] Durovič L'. Paradigmatika spisovnej ruštiny. Bratislava, 1964.
- [8] Trubetzkoy N. S. Das morphonologische System der russischen Sprache. TCLP, 1934, N. 5.
- [9] Зализняк А. А. Грамматический словарь русского языка. М., 1977.
- [10] Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. М., 1971.
- [11] 『染谷茂ロシア語文法小話』美顕プリンテング出版部 1979.
- [12] Толковый словарь русского языка. Под редакцией Ушакова Д. Н.
- [13] Словарь современного русского литературного языка тт. 1-17. М.-Л., 1950-1965.
- [14] 城田俊「ロシア語の名詞変化—綴字と音声—」『外国語・外国文学研究』第24号, 別冊 1978.
- [15] 城田俊「《性》と《情》と変化」『ロシア語ロシア文学研究』第13号, 1981.
- [16] Редькин В. А. Акцентология современного русского литературного языка, М., 1971.

Правильна ли орфографическая форма
слова среднего рода «полюмя» ?

Сюн СИРОТА

Существительные среднего рода на -е, как например, «море», «поле», относятся к I склонению, а существительные среднего рода на -мя, как например, «имя», «время»——к III склонению. (см. Русская грамматика. Т. I. М., Издательство АН СССР. 1980. стр. 484-491.) Последние образуют все падежные формы, кроме форм именительного и винительного падежей, от основы на мягкую согласную [n'] (време [n']-, име [n']-, пламе [n']-), а у первых такой специфической черты нет. См. мо [r']-, по [l']-.

К существительным среднего рода на -мя обычно относится слово «полюмя». Формы косвенных падежей этого слова, кроме творительного падежа «полюмем», не употребительны. Эта единственно употребляемая форма косвенных падежей не образуется от основы на мягкую согласную [n'], а образуется от основы прямых падежей на [m'] : полю [m'эм], полю [m'э].

Оно склоняется, по крайней мере фонетически, совершенно одинаково как существительные среднего рода на -е, относящиеся к I склонению. См. полюмя [rólm'э]—поле [ról'э] (им., вин. п.), полюмем [rólm'эм]—полем [ról'эм] (тв. п.).

Итак, мы должны считать, что к I склонению относятся слова среднего рода на -е и слово «полюмя», а к III склонению относятся все слова среднего рода на -мя, кроме слова «полюмя». Но это сильно осложняет грамматическое описание склонений. Думается, что, кроме этимологических соображений, нет никакого основания дать этому слову орфографическую форму «полюмя». Если мы напишем орфографически его формы прямых падежей как «полюме», то мы нисколько не исказим его фонетического облика и вместе с тем избежим осложнения в описаниях. Не будет нарушен ни один из принципов русской орфографии, кроме традиции. См. полюме [póľim'ə]—поле [póľə], полимем [póľim'əm]~[póľim'im]—полем [póľəm]~[póľim].